小倉山

青樹榮昔日新話

泉竜亭是正著

櫻齋房種画

延壽堂梓

A457
1
010190508604
48-8070

小倉山
青嵐榮
昔日新話
羽田冨次郎著
泉竜亭是正綴
櫻齋房種画

小倉山青樹栄昔日新話

泉竜亭作

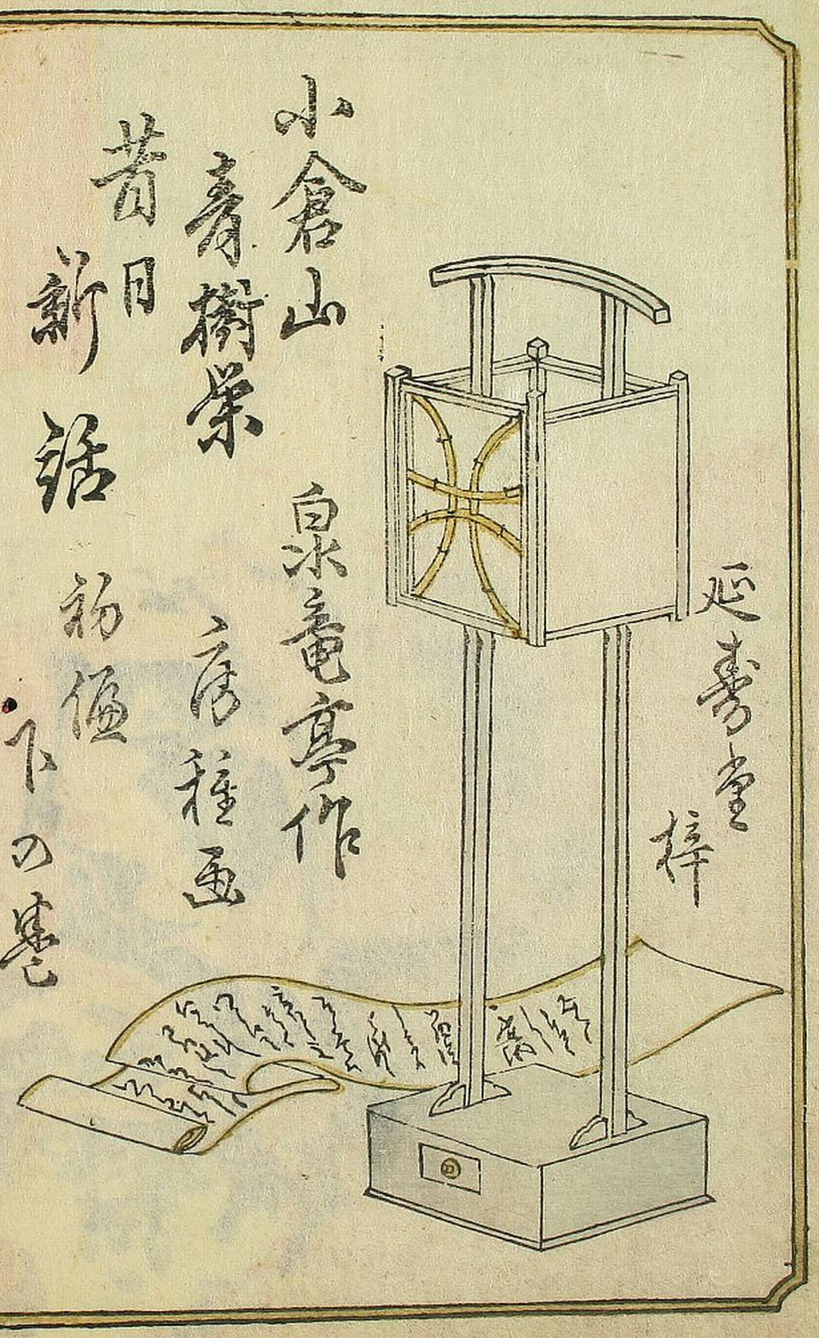
唐種玉

初編

下の巻

延壽堂

梓



予年来珍談を好み聞ごとに假名書して良久しく反古を蓄ふるなれ何ある所以ぞや只徒に鼠の住家と思ひしふ此ごろ書林の主人予が葉家に来りて何ぐる諸君の心に叶へ物と綴きよと言ふ隨ひ僕も又好むる道なれば幸ひ文庫ふ秘置し青木が諸行を綴らんと慨勇二葉をえどめとるー後い大樹とある中のうち桐屋のかしえ賜ひ浮名も香る小梅の里ふ小倉小僧長次郎が悪事と交へて梓ふ彫り昔日新話題号をー先初編うり賣出ー遠る君い音ふも聞せ近きい目ふも見給ひー評判高き青木氏が一覧綴うー小冊を徒手に取さもあらばや萬国見者ふ願ふと然り

明治十一
清月

泉竜亭是正述

幕府旗下
荒士統領
青木彌太郎

新吉原角町桐屋の
後ふ
青木が妾雲霧のおろく
娼妓賑ひ

幕府旗下
津田孝次郎

小倉庵の隠居
長左エ門妾お花

曲者の
小倉屋の抱
料理人
三之助
毒悪
小梅村
小倉屋長次郎

凡人として賢
愚老若の分
間無色欲ハ
溺て其身を
亡ぼ者古の
書ハいハず更
なり今ハ日く
世ハ流行新聞紙上へ
揚らるとつ仇な浮名
や盗ゝして汚名を残
せるの多ゝ愛ハ
暫く兇一男ゝる
青木弥太郎ゝ一行り
を尋ぬるハ今を去る

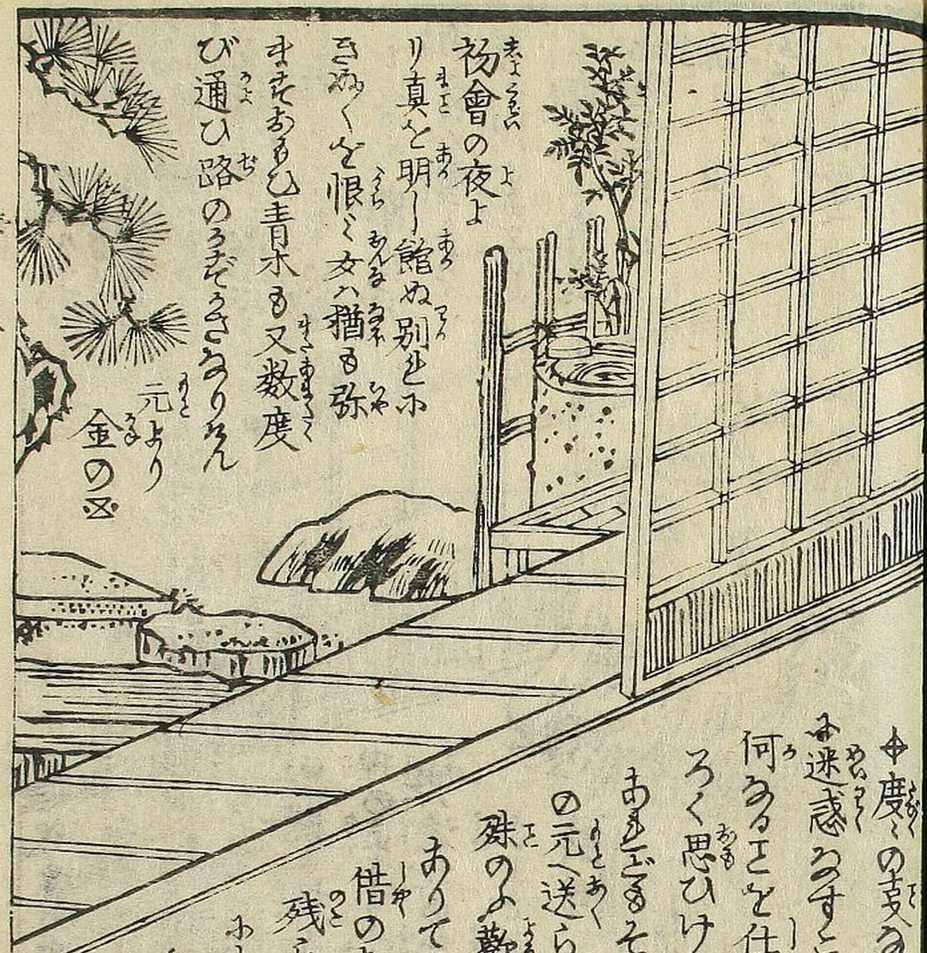
三十有餘年幕
府家茂公長門
の方へ
三在
て
江戸城
を新發
の剣そゞ苗
守中の三ゝり名併
も家敷ハ本所の長
崎町の流ゝさゝ絶ぬ南の割下水ゝゞハ縁ある
徳川の代ゝ旗本の職ゆゝて賜る所ハ二百俵
青木弥太郎ハ男振さゝ美敷才智人ハ勝を殊
○更兵古流河の如くハして
組頭のゝ名ハより勘定
所出役より評定所苗役
と迄昇進されゞる生
質婬酒花車ハ廓
ゝバ重役其行跡を
疎ド無勤入ハ致せ

どる青木は是を憂とせば結句兼楽と
思ひ乱理ふつのる外雀内を守り
奥方は夫の不行跡を引うえて心生さへ
器量さへ女子の道をくとろ〳〵今年
三ツのる真弥を労り折ふしては夫へ對
一只管諫言ふ及び〳〵どる良薬口
ふ苦〳〵のるへく青木は苦り〳〵面顔
ゆてらいらゞ意見で止むとるら斯迫
とうとふ窮〳〵はせめと
煙管で奥を
うちくたた
面白ら
ぬ口吉と
さう〳〵耳持ね

立病ここそいつそうけきどもそを
弥太郎は案事もやらば我家へも
寄付づ剰さへとのわどは津田
孝次郎小倉小増長次郎と
いふ曲者ホを誘引て新吉原
角町桐屋の賑ひぶ色香は迷
ひ現心とろ〳〵ろべろの
賑ひも又いろる
悪さんふや

上意はけるく
表の方へ出
ふるる跡見
送りて奥方
は幼るを我
子を抱き
表へと走る
雨の降りも
さりあつとの
乱理を安
事つ幼き
真弥ぶ行末
こうくのとを
思ひ煩ひて。

必ずる木ハ今ハ互ニ
ホ身のつまりと成ホ
ラり是ふぎつひと云
女ハ其頃器量人
を驚ス一ぎつホ手
取りの博煉ホて荒
嫌不節のものつま
び己飯と迷ひを取り
一弥太郎を招ん
と髪の飾身の衣を
剥ラるいの物を
借りつくり加之己
ラらば客人の拠さ
ぐーホ及びーと中



初會の夜よ
り真と明ー館ぬ別ヒホ
きぬくと恨く女ハ猶も弥
まさあるも青木も又数度
び通ひ路のうぞうきねりそん
元より
金の☒

中度くの美ラるや主人もこれが為
ホ迷惑ラすること毎度ラり後くハ如
何ラるヒを仕出さうんと底さくと
ろく思ひけん今ヒ少ーの年季ハ
あるとるそを免うせホして青木
の元へ送らんと言ーラば青木ハ
殊のよ歡びラづの年月廓ホ
ありて傍輩初め東西ホ古
借のあひめありラらそを
残らず踏倒ー早こ
ホして青木と共ホ廓
をこそハ出ホラり斯て
青木ハ賑ひと伴
ひ妻子の

手前を思ひ合ん同じ
土地なる水呑馬場の
町(囲ひ置名をも
辰と改めて誰憚り
の関もの東の間
も辺りを離れつゝ
雨となり雲とち
ぢむ辰が色香ゆ
惑溺す青木い
此程妻子を
疎ゝ
あたらと
して我家へ
引入る奥方

弥太郎の奥方は夫ゆゑ
も名のゆゑて今日で三月も戻
りぬ難面殿を恨るもせず三ッ
なる子をば労りて朝夕ゆ千
早振る神ゆ願ひもちろひと殿の乱
理の直るよう思ひ祈りて朝夕ゆ
袖は涙だの玉垂げ髪も削らら取
乱せど花橘の香ぞ匂へ
床敷苗守
を守りて
居る折も
障子を
開く兄と

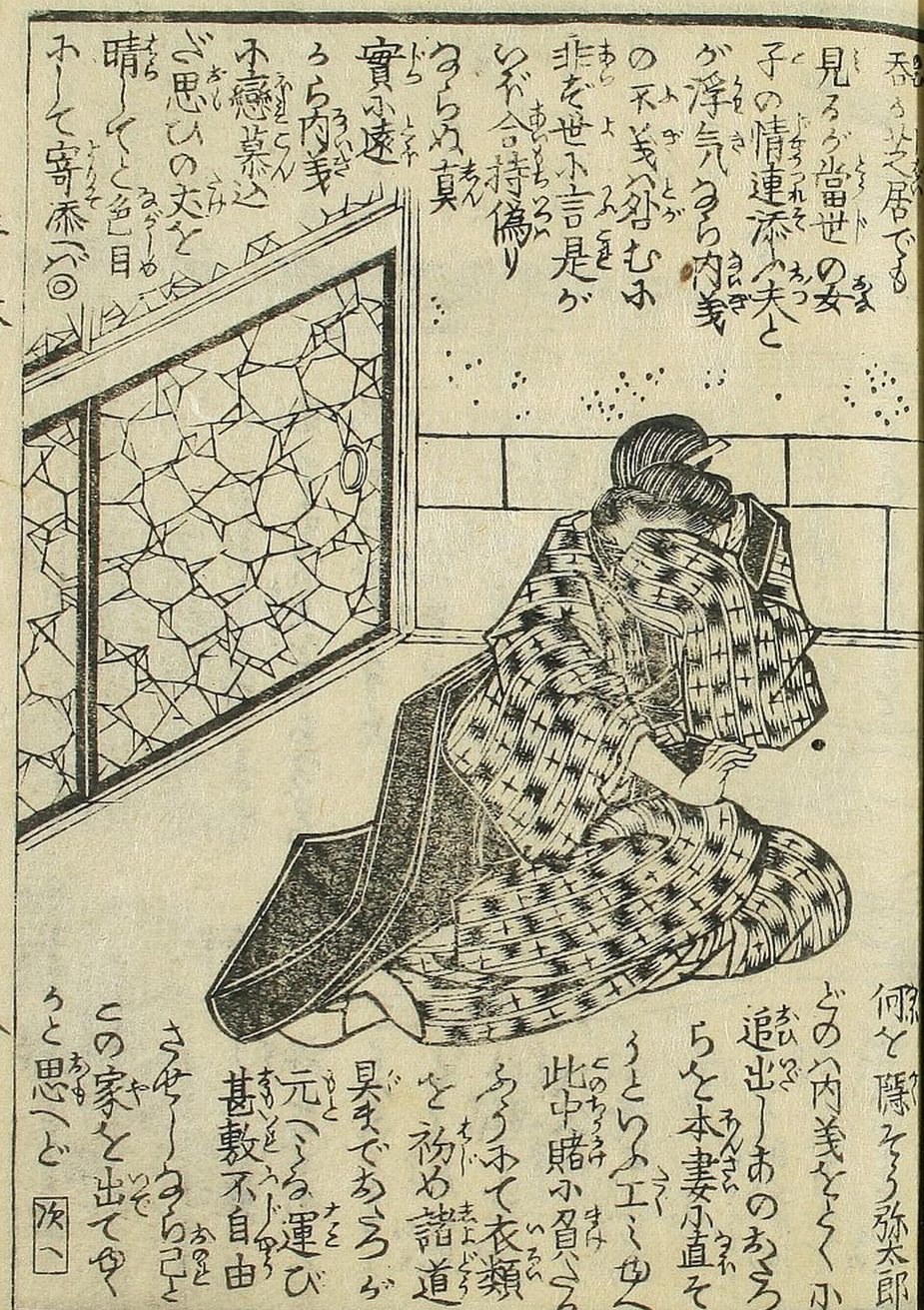
ゆ直さんと一ッの
謀りを設けるて
真友なる津田孝次
郎を招き耳ゆ口よ
せ私言なべ津田
へ蜜ゆ笑を含ゝ
さらい狂言を行
うと青木ゆ別
を出てゆ
爰ゆ又

笑ひて来りし
いるて悪意
の孝次ら小
児は何ゆ長然
〳〵今日も主人
へ苗守なりしら
跡を守りし御内
伐は飽で終日を
針仕事・ちんぢう
をるもとゆ寄
つもそゆ殿
あの中うゆ
あらぶ元へ
ちいり

込是見よとの色狂ひそを知りながら御内義へ恪気も爲ぞあとなく留守を守るべけらん酒でも

◎其手を取てつゝのけつ戯まとを

お寄我身の心も知りまこと此程殿の放埒不積る苦労山程あり浮気所あぢきなくも不義徒らと如何ふせん夫在る身と知りながら此後へ思ひ止りやと省慎さて大笑笑ひ斯まで内義ふ戀慕とゝ元をくまへ可笑哉



否う其之居でも見るゞ當世の女子の情連添へ夫とゞ浮気ゝら内義の不義へ外むふ非を世ふ言是がゝゞ合持偽りゝらゝ真實ふ遠ゝら内義ふ戀慕之ゞ思ひの丈を晴ゝと色目ふて寄添へ◎

何と隙そう弥太郎どの内義をくふ追出しあのゝらゝと本妻ふ直そうとゝふ工ゝ此中賭ふ負へゝふて衣類を初め諸道具まであゝゞ元へゝる運び甚敷不自由さゝゝゝらこゝこの家を出てやうと思へど

やそろ
で出もやらぬ
仇働らき
のつき女
顔を見るの
も忌敷と我
をさのくて
詰けるよ内
美を口説て
連をぶぐ
そをを名と

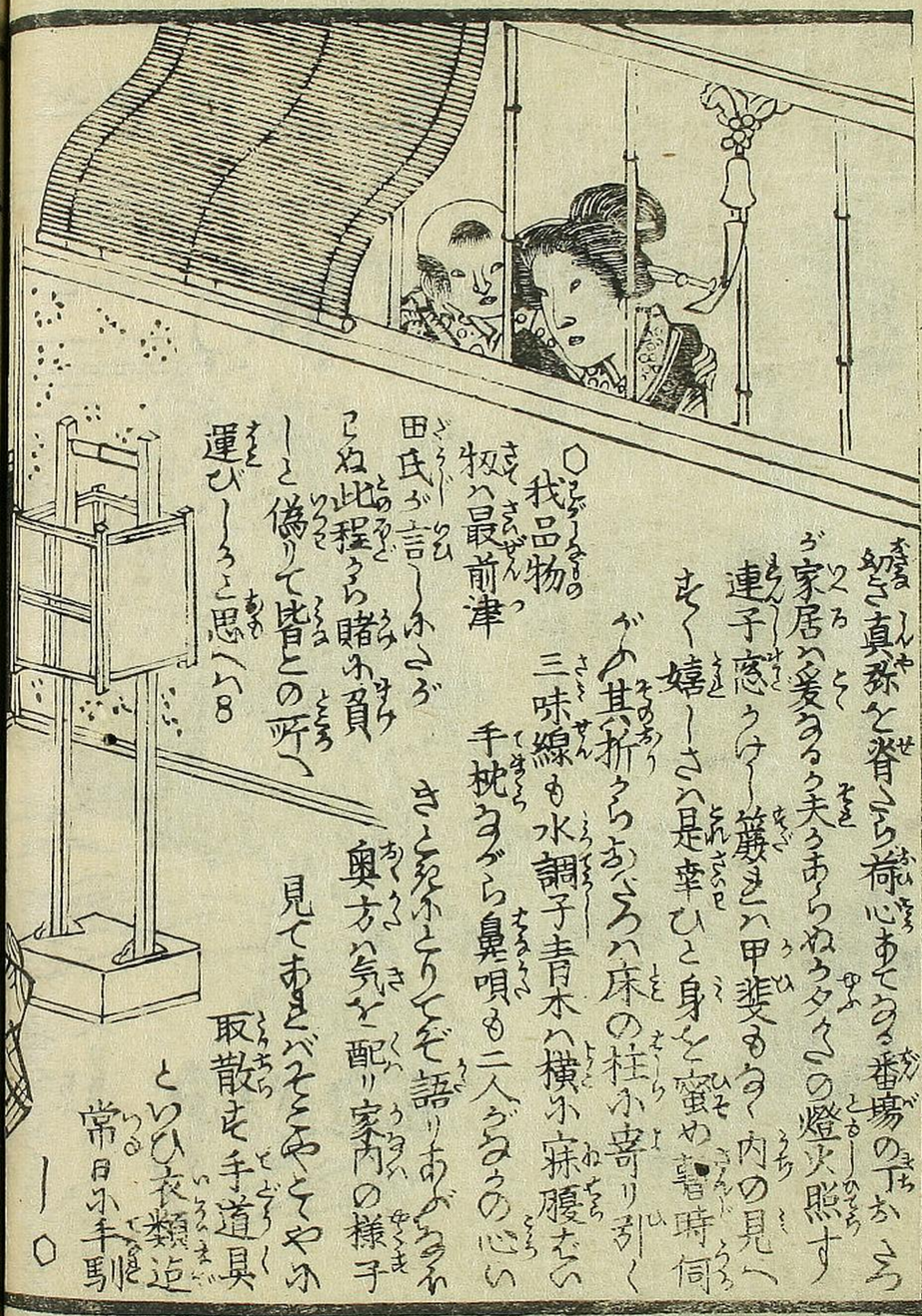
◇川竹（賣代すく）其代ハ
何をふるうと二分ゐりと初
のゐどハ馴合で口説て見る
罪のゐどそら恐ろしき邪
見ゐるあんゐ夫をもちゐぐら
恨もゐさでおとゐた
心ぢくいく器量さん
女子の道をうざる
内美偽り多ち色を
も今ハ真を打
明し真ら底
迫迷ひる戀墓
の闇を晴してと
又ひぬの吹ると

○微笑世ハ捨らまし我く
おべく迫思ひせ玉ひしハ
更く仇とハ思てゐぐも
今ハうとも言難く又
詮ぐもあくら
らんとうよるこ
もゐ糸の思
ひ乱ゐ津田
氏ハ今更ゐ
言葉ゐく立端
もゐぐ見へ
ふる時外門の
ゐ人あるを
葉ひふして其

柳流しハ○

□青木ぐ常ハ
組頭某より
急用と知らせハ
寄ハ奥方も
等閑ゐらね
ようう○内

場を立て戻りる
入り違ひて来ぐり
□



幼き真孫を脊ら荷心あてゐる番場の下おろ
ご家居い爰ゐるう夫うあらぬう夕々この燈火照す
連子窓うけ〜簇まハ甲斐もゐ〜内の見へ
ま〜〜嬉〜さハ是幸ひと身を蜜ゆ暫時伺
がの其折ゐらあぐろハ床の柱ゐ寄り引く
三味線も水調子青木ハ横ゐ寐腹だい
手枕ゐゐら鼻唄も二人ゐゐの心い
きとゑゐとりてぞ語りあゐられ
奥方ハ気を配り案内の様子
見てあるべそこやそやゐ
取散を手道具
といひ衣類迫
常日ゐ手馴

○我品物
牧ハ最前津
田氏ゐ言〜ゐ〜ぶ
ゐね此程ゐら賭ゐ負
〜と偽りて皆との所へ
運び〜ゐと思へハ

8いと口惜〜
ゐ身を寄て
伺ゐ折ゐら
い青木ゐ打向ひ
我ゐ身廓ゐ在
〜よ〜妻ある
客どうち招き
お内芸さん〜元
を揉ゐるゐと
く面白〜

今又君を
呼び近付
斤時

過ちを離さみば御内義さんの
悋気のわどころいなことであろう
でとりくび青木い頷さて世けん
知らぬのあのおみ言びあろうさ
機りくとい気の付よいね者
ろらぬと聞てあろうへ微笑さる
して多んと岩玉ひ子までね
ろる御内義といろでろう悪く
あるすらん可愛ごらんす其
殿ごちや恨めしやと秋波い
見る高頬い加へろる揚枝で
一寸とつくりくとあろうの顔
とろろめりむくの好ざる我
女房ろりをこるのもいやさ△

△ゆく毒でも呑まる
虎狼南ゆでもいろそ
のこい取つまこ一ありひ
い死んごさら自出さい
とこくあのりくとるまあの
様ね因果ね奴ハ業ゴ
絶ねこ死ねざるといみと
あろいいちるらひ機る
ござくまこさごとる
外ゆ去ゆハいくらも
あると二人ごろろ
を奥うへ外方ゆ
くと立間
ろり

小倉山青樹榮 **昔日新話** 泉竜亭是正作 初編より追々出版

這ハ徳川家の旗下ゆ青木弥太郎小倉菴長吉唱妓賑ひゆ春情ゆ事寄暴借強談の悪事青木の碧巌難辛苦ゆ記し繪入の草紙ゆ綴りこれで近世の珍書ろり

假名手本忠臣藏 露光作 芳虎画

延壽百人一首 中本一冊 玉蘭齋画

白縫物譚 豊国画 初編より六二編マデ刻成 故人種員稿種彦作 ゆ板菊寿堂主人當今 日ゑ物文社主ゑ後編と 出板ゆる水脈ゆ〜ゑよろゑ 用紙ゆゑ仮店ろり一屋 余人ろつき出板ゆ者寄方 陸續ゆ来ゑ伏て希ゆ 明治十年 板元敬白

地本錦繪問屋 日本橋通二丁目四番地 延壽堂 小林 **丸屋鉄次郎板元**

奥方今ハ何とぞころふべき
表の格子戸押明つ入るを
ちらりと見るよりも弥太郎
おろへ目配せ〳〵次の間へと又

又隠居〳〵が其時
奥方お京へ向ひ
私〳〵ハ青木が※

※家内毎度なぐら弥太郎が
厚ひ御世話ふりまする
今日ハ至急な用事が出来逢
ねばならぬと在て一寸向ひ
ふ
奈り〳〵程御逢せなさと
てくださるといめをおさ
つハ尻目ふりけそハ門違ひ
ふてあるならんそんな
お方ハ居せぬといめを
返して奥方ハおうく
なくとものぞうぞして
一寸合して下さ
もといなども更
小間入ぶ

無理
なる事を
言りのうな
あらぬお
さへ逢せよ
と世ふりの
尾ふ王とや
ら夫程
疑ひ王ひ
ない家探な
り共おさま
ひね若やさし
い其跡で人ちがひでる

程知
らぬ大
白痴うる
衣をも厭ふ
爰ふまるり ふ
うせおらて
我ふ恥を
あるく

怨るを聞て
奥方ハ
ゆわ
次へ

在ならい私しも其侭捨置ぬと白眼付る
を奥方ハ七年ゝとせ添うる夫いつでも美を
見違ふべ兄今ゝ其所隠ゝ
見哀さぶてうせまたといひさる
おく駈寄て次の間明る其拍子
青木ハてとく飛で出奥の髪ゝひ
掴ゝ其場へ倒と踏ふおり拳を上て二ツ三ツ
打ば四ツふらざり真弥ハうつと泣出
うさるこるひョのうてさる坊ず手を
合せて過る程りゝ堪忍ゝて
下さるとと詫る心の労ゝく
側ふお ろハたまゝ ぐゝ仇
ずまゝひ静ふゝゝ此子ぶ拉のて上気
るといくども青木ハ耳ゆる掛ゞづこの

恨めしく嫉敷真意の星眼朱をそゝぐ
所詮死氣で居る者を打とも踏とも
殺さるゝ殿の心のせむ中の小勝手小成
て王ゝと聞て青木ハ知らるゝこと拳を
固めて打〳〵く父母の手ひ子の真孫手
足小縄ひて泣喚を見向もせらづの〳〵撫り
奥方目掛けて打んとなを拍子
小戸障子ぢら〳〵
と倒さ〳〵奥
を起〳〵もせらづ
力小任〳〵て
〳〵〳〵

〳〵もかゝろうてとゞめかゝり

青木ハ再び
留りゝ情
奥方ハ
邪見の拳小打
〳〵
多〳〵安
もとゞ乱髪

鈴木亭

青木ハ胸の煮くるゝ上瓶も火鉢へころ
け落ちゝと立うる成神楽ゝろひゝ騒く
手ひふとりつく父雅子をおせ〳〵もの
と奥方ハ手ゝ手を引立て表の方へ逃
げ出〳〵る其跡追んとす〳〵る折

又上つぶら雅子を右手へ去つると
抱へ帯引ずりつると番場の町
を退き出道へあやつる官戸川昔へ
今ふ引ゑて物淋しくも衣
ある多田の棄師も早過て
いと涙ぐふ呉竹の
町を別るゝぐりつく
五平妻橋と聞くらふ夫を
恨み身をうとち死
でおろへ此恨く返さん
者と奥方仁上帯解
てきやくと森仁雅子
我躰へ重ふらくう称名唱身を
踊らせてざんぶりと水

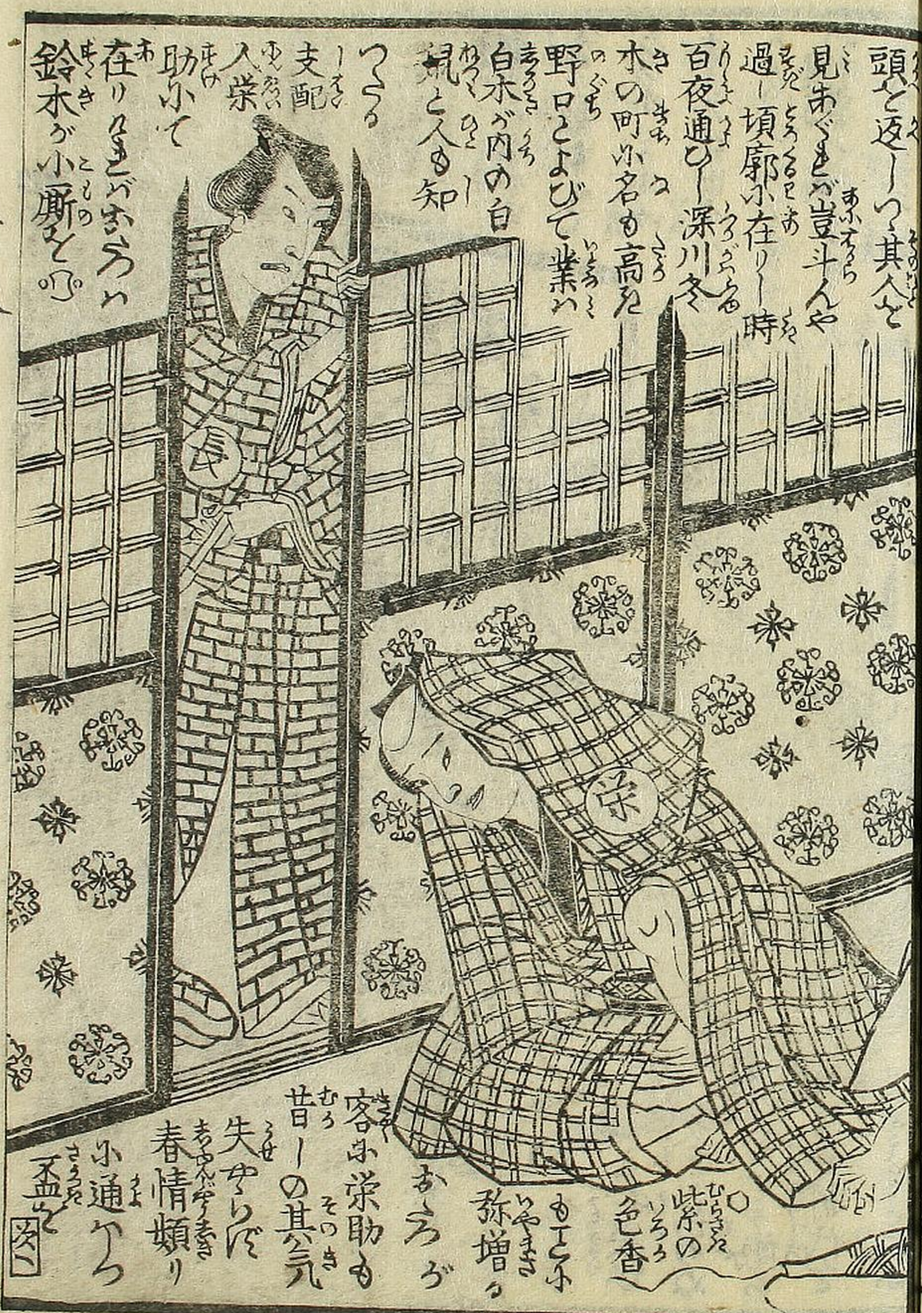
招き朝夕悪敷友を呼び只
管乱暴恣ふて鬼の女房
あや鬼女とつら
つらへ
是ふ
を悦
て

底深く飛込ざり。
此時橋間
一漁舟来り
網足高く打込ーぐ
手綱ゑくり重ゑげふ
ーそ引揚つ擂を押切て闇の夜ふ
いつくとも無漕行め編者の曰此漁
舟の物語りハ三編ふ至り自然知る所
在べ見る人必ず狂玉ゑる
仇ー事ハさて置て爰ふ
弥太郎ハ辛ゑめ見せの妻子を退け
愛妾まゑと本妻ふ直さんと番場
の妾宅仁引拂ひ我居屋鋪へおゑを

又ゑ
ふふ思
ひつ月
助を

送る其内ハ慶應三ツ子りハ
ろり頃ハ弥生の末つ方空も朧の花
曇りふぐれと共ハ降り出て春雨
最もあわるハ折ゝも青水ハ客
ありて内の波女ァの見ぐるとバ
おろハ自らら下水を渡りつゝ向ひ
の鈴木亭ころ時ゆゑる酒楼ハ至
種々の物を早く持てこよと
誂らへ置度らんと
あるゝ折ゝも此
家なる二階の方
ハ人在りてと
ゆゑと言者
ありおろハ

頭と返ゝつ其人と
見あぐるとバ豈斗ハや
過ゝ頃廓ハ在りゝ時
百夜通ひゝ深川冬
水の町ハ名も高ク
野口とよびて業い
白ハが内の白
鼠と人も知
つゝる
支配
人栄
助ハて
在りまとバおろい
鈴木ぐハ小厮と



してさて
なまぐるさ
つゝ元よ
り好なる
酒醉ゝ来
ドてきの字
と也脛の白さを
顯しつ菓子の
香り都郁とそ
ゝ白おろゝ吹
来ゝ栄助今ハさも
りなきかゝぞこらく
つ利寄て穏りぎまゝ
ゝ動く胸

おろゝいろくとゝ考すーげゝ
そこゝ如才ハ非ごり元最
前駿ぎ〜その紛まと
らと早くも取得〜と
栄助ゝ懐中ものと
り出〜て、
見せゝ
ゝど青
木ハ莞ゝ
とゝ笑ひ
今ゝ初わぬ
はんこゝ働ら
ゝ骨折代を
改めとと云ゝ

の段階梯足元
東ゝ踏鳴〜
二階ゝ来る
其人ゝ言ゝ
と知るゝ弥
太郎ゝて右手ゝ刀ゝ掴く
婚賊其所を動くゝと二
人を討んと振り揚る其
袖下ゝ潜り栄助早くも
身を逃ゝ命らゝがけ行
ぬ跡ゝかゝ青木を見つるゝ
莞とり打笑ひ来てゝ
可笑さよさハあとゝて約〜
る彼の一件ゝと問ひ〜時

おろゝい
栄助ゝ
鼻紙入
を開さ
しゝ金
ハ桔ゝ三十四始終一
関ゝ和へる小倉ゝ増ハ障
子を開ゝ思ゝ違とぬ
今宵の狂言ゝと

次へ

手軽ゆる大當り兼て貴君と
示し合せと六ケ敷ふ及びなば
我又奴を引捕へ只返さーと
思ひしふ奥方どの賢き働奴
が物とりのすつ早くも美と
追ひ拂ひ手間隙入ぬ大出来
とゝく二人も打笑ひ美ハ酒
店の人足茂く我家へ
戻りて悦びの酒と
汲んとあふくふ其
家の内ふ價ひと拂ひ
三人連立屋敷へ戻り
酒宴と催ふ一奪ひ
る金も少く長次ふ

深ふ
お花ふ出合
見まい入目の
関もの渡り

糸柳靡くびやうう
もあらざりー
を長次うふ
懲

價ふ
是を持マ
賭事ふ春の夜や
更て果ふ明け
行ど長次ふ
其夜仕合悪
しく又一ユ丈
うきうんづと
青水ど屋ーを
を立出ふ我
家へ入らんと
庭りを
歩む所
る日頃ふ
ら思ひ

ふ舟と記
寄ど
ちふ常
ふら

花

長次ど心ざ
爪たぢたして動ざる風
門の

先ふ
さくら
ぐりと
の蔦
うふら

次へ

つき

綾ふまろ
つる繻子の帯
其端取て引寄
るを振り解うと爭ふと
わん出合ごらん小親父

とる白髪頭小抱付
長次あわてを尽
まるとおかつを長
次頭を撫るら長
左ヱ門小面北う
恥じらるお
花を悪こ何う恨こを
返さんと朝名豆を計りろ
爰小又青木夫婦小非剥小等しく
業をゐ栄助を謀りて少く金をえ
うまとるいで是を保うえや朝日小霜の消るゞ如く
忽ち費しくまゞ又悪計を工まんと我家を出小倉小増を
訪らいゞ其日らこゞく世臣ゑありさる青木小是を問ひるる小長次郎
答へて詰るやの君ゆるゞひて知りつらん我里近く住玉ふ幕府の坐人

じゞ高崎傳五右エ門と呼び
齢六十近く一人の娘在り婿取る身は
在るまじくとて孝行の美男喰然
あるべくして其年も余程長るゝ及べども
未だ定まる夫もなく只明暮俳優や封間人を
呼び集ひ娘奢り親い恪嗇なるゝ
恵しとの外が逢ふ日の本小仕合能今へ坐中の
▲命小
よりと
を迫
御藏前
熟椎職此中幕府の
▲
そうて
浦々
ね濱
の鰆
砂の
高崎
◎
呼ゆい
又盛て
入るとや
ら金在る
三ん山より
高一衆と
の金うた
おとき
せんと
有き義青木
おうつも
細小
取りなしが
知行取と成
玉ひ其悦び
小寄るものゝ
合ゝ朝より雲
在りして常小
出入の我宿ゝ
まへ種々の
物と誂へ
多く斯斗り
こて世話した
り世ふり宝在◎
孝
長
聞居外の
宝らを算々迎我懐中の
次へ

溜るでもなくうる隙
也在らば外に思
案もあるそふなと
云ば孫太郎莞爾
と笑ひ人の疝気
を頭痛に家よ
り我千金得ること
といへば長次も横手
をうち然らば今宵
我宿の出入の茂兵衛と申ひ
間毎のメリ見極
め置兩蠟非
法の荒仕事夜半
に紛とてづまり

こりゃ出来ましと三
人去て更行空を
待ちかねる程
小高崎の方に
今宵悦びの大一
坐封間未社の入
乱と取笑踊りの
ろくとあるとば
業唄踊りの揃
量踊り在り動と
一さう住吉おどり
酒戦も安く果
しかば主人と初
め客人も酔に

花

来りて倒るる夜もあけ濃る浅草
寺の鐘の音聞べ子刻も早過て足音
静に忍ぶ頃盗賊能忍び入り
家内の者を初として客をも

不残誠め置水りの知き又を
引被主人小金の案内させ
二百餘金を奪ひとり東雲
近所頃小なん跡くらまし
小りう是別人つらば雲霧のお
辰小倉小増長次郎その家の抱料
理人三人助津田孝次郎八百屋鉄平
なん忍びぐ小ぬぶう宿小集り奪ひ
し金を配分なさんと一間小籠りて居
りしあり此家の主人長左工門小妾お花い
小用をとるとて廊下つるくで戻るさふ密談
なせし一下間の方何心なくうかがき
しをあらハ早くもとまを見つ人の
けをいとひしらべる一同小驚くを

長次早くも障子を
開放おちるみゞ蔭を見
送りて様る大事とこゝらと
ゝゞ我輩の姑けも上差小及び
て長次ハッの謀りを設け我戀
の叶なざる其意趣を返さんと
又如何なるこを仕出せも
そハ次の巻小説くべし

御角明治十年分芝
本所外手町三番地
著者羽田富次郎

算法并用文證書類品々

草双紙類一代記讀切本類品々

汚穢ちのこと
こまかちの一ざる
ゝ病人分小見ゝを
てるみゝ丹ひるまる
べくハ大病人ゝ丹ひ
くよし

事情 明治太平記 村井静馬著 伏見より熊本萩ゝ至ル十五編 鮮齋永濯画 十六編より鹿児島ゝ至ル

○初編ハ伏見戦争と始りとして上野東叡山焼討より其外御一新業の事情明細ゝ記き居るゞゝ人情開化一目まるゞとして平かな付繪入よしゝ婦女子ゝも解しやすく綴り書あり

書肆 地本問屋 日本橋通二丁目四番地 延壽堂 小林鉄次郎板元